

かお金があるということではなくて、やはりエリートというものはある種の使命感をもって国際関係なり国民なりに尽くさなければならないという意味だと思っています。そういう意識を具体的には申しませんが、近衛篤磨は強くもっていた。そういうものがノーブルネス・オブ・リッチという概念がやはり同文書院に残ったのではないかと思います。

そしてこの考え方以上に重要なのが、まさに根津一の根津精神です。これまでいろんな方がご報告でご指摘になられていますが、根津先生の考え方の中心には儒教、特に陽明学がございます。陽明学というのは、簡単に言うと…東洋思想の専門家の方がいらして申し上げにくいのですが、簡単に言うと人の痛みを我が痛み、あるいは民の痛みは我が痛みというところがあるように思います。国家間で言うと、中国の痛みは我が日本の痛みと。そういう大同論、王道論に結びついてくることもございます。卒業生の回想によると、根津氏は常にこの大同ということを非常に重視していたと。そういう考え方というものの、いわゆる根津精神というものが同文書院の精神、まさに近衛篤磨のノーブルネス・オブ・リッチとくっついて一つの同文書院の精神になり、それが受け継がれて日中間で活躍する日本人の人材が作られていったと思います。このような人材が作られたというのは日本のみならず中国にとっても非常にプラスであったのではないかと私は思います。

最後の最後に30秒だけ申し上げたいのですが。繰り返しになりますが、今や東亜同文書院の研究は国際的学際的ということが必要な時期にきていると思います。そして我々はそれをやるべきだと思いますし、アメリカ、ヨーロッパ、中国、韓国、日本の研究者がそれを協力してできると思います。これを皆様方にぜひやろうではないかと訴えて、このコメントを終わりにしたいと思います。

Yes, we can.

馬場毅（東亜同文書院大学記念センター）：どうも栗田先生、ありがとうございます。今日のご報告の方、栗田先生も含めて壇上に上がっていただきまして、それでまずフロアからのご質問をいただいて、同時に最後に栗田先生の各報告者に対するコメントに対してのお答えをいただきたいと思っています。どうぞ壇上に上がってお座りください。今日のご報告の順番にお座りいただきたいと思います。最初に時間を申し上げます。一応先ほどもお話ししましたように最後に懇親会を予定していますので、ここでの時間をどんなに遅くても5時50分までにさせていただきます。したがって、最初にフロアから各先生のご質問なりご意見をいただきたいと思っています。それが出そろったところで、先ほどの栗田先生のコメント、各報告者に対してのコメントがあったかと思いますが、それをあわせて報告者の方に最後にお答えいただきたいと思っています。それではどなたに質問されるか、あるいは意見を出されるかを述べられて。はい、ではリー先生、お願いします。

リー（愛知大学）：愛知大学経済学部のリーです。レイノルズ先生に一つお尋ねします。ご存知のように東亜同文書院に関する歴史的な評価は、特にアメリカではエドガー・スノーの意見がこれまで支配的ではないかと。つまりスパイ学校という話です。特に歴史的なことを考えますと、エドガー・スノーほど中国に関する世界的なオピニオンリーダーはいませんので、だから彼の話はおそらく戦前戦中、それから戦後のアメリカ、ひいては世界に与えた影響が非常に大きいのではないかと思います。そこで、レイノルズ先生はそれは違うのだという意見を今より20年前に出されて、アメリカにおける東亜同文書院に対する評価はレイノルズ先生が本を出された当時、そして今、要するにレイノルズ先生の話とエドガー・スノーの話とどっ

ちが主流をなしているのか。それはどのように変化しているのか。その辺りを紹介していただけるとありがたいと思います。以上です。

馬場毅（東亜同文書院大学記念センター）：レイノルズ先生、ちょっとお待ちください。ほかの方の質問もまとめてお受けしてからお答えいただきたいと思います。ほかにはいかがでしょうか。はい、では前のほう。

大沢（東洋文庫）：東洋文庫の大沢と申します。今日はいろいろ面白いお話をありがとうございました。ニキ先生に質問させていただきます。私も実は東洋文庫でライブラリアンをしております、非常に刺激的なお話だったのですが、Hathi Trust、これはおそらく日本ではほとんど知られていないと思います。Hathi Trustなのですが、たぶん詳細はHathi Trustのウェブページを見ればわかると思うのですが、簡単でいいのですが、理念といいますか作った動機、あるいは歴史、あるいはほかにも今電子化、デジタル化のプロジェクトはあるわけです。たとえばカーネギーメロンのミリオンブックスプロジェクトや、インターネットアーカイブスのプロジェクトなど。なぜほかのプロジェクトに参加せずにこのHathi Trustというものを自分たちで立ち上げたかということをお話いただければと思います。長くなってすみません。

馬場毅（東亜同文書院大学記念センター）：ほかにはいかがでしょうか。では大島先生。

大島（愛知大学）：愛知大学の大島です。レイノルズ先生に簡単な質問を一つと、ブルギエール先生にもう一つ質問したいと思います。東亜同文書院スパイ学校説の問題はもうここでは解決済みであると。そんなことはなくて、ビジネススクールであったということが支配的になっていますが、

そういう雰囲気ですが、しかし私は中国の研究者まで含めて考えますと、まだ解決されていないように思います。

そこで一つ、レイノルズ先生にお尋ねなのですが、確かに日中戦争が始まるまでの東亜同文書院の本質的というか主要な側面は、商業地理についてああいう膨大な調査をやりましたことから見てもわかりますように、これはビジネススクールだったと思うのですが、日中戦争以後、1937年以降、東亜同文書院の卒業生が告白している、証言していることなのですが、その当時大旅行は日本軍の管理の下にあって、日本軍の命ずるようなことしかできなかったということです。この37年以降の調査報告は日本にはなくて、中国の北京図書館にあるのですが、そこまで含めて東亜同文書院を平和的で自立的な教育機関、調査機関であったと言えるかどうかについてご意見をお伺いしたいのです。

もう一つはブルガー先生に対してですが、スパイという言葉、これは日本では非常に暗いネガティブな響きをもつわけですが、商業地理について、特に今日お話しになりました第一次大戦までの中国の商業地理についての調査を一生懸命やるということまでスパイと言えるかどうか。スパイと言いますと非常に軍事的な感じがするのですが、その辺はフランス語、英語でスパイというとういう意味があるのか。このことを解決しないとスパイというものについての厳密な定義をしておかないといつまでも誤解を招き、いつまでも残っていくように思うのですが。すみません。

馬場毅（東亜同文書院大学記念センター）：ほかにはいかがでしょうか。では前の方。

発言者不明：実は私の父が東亜同文書院大学を出ています。ですので、いろんな話を聞いて今日は

参考になりましたが、ニキ・ケンジ先生に一つお話ししたいと思っています。これはどんなことにも言えることだと思いますが、今インターネットが普及してきて活字離れになってきています。特に新聞業界は大変だということを聞いていますが、新聞業界はどうですか、これからつぶれてしまいきますか。その辺を先生に判断してもらえればありがたいと思いますが。僕も実は新聞の仕事を定年までやっていたものですから、その辺をちょっと聞きたいと思っています。本当は文献に残したり、新聞で残したり、インターネットで残したり、いろんな手段で残してもらえればいいけれど、なかなかそうはいかないような気がするものですから、その辺ちょっとお願いします。

馬場毅（東亜同文書院大学記念センター）：わかりました。ほかにいかがでしょうか。ではスズキ先生。

Mr. Suzuki: Good afternoon. I will speak English. My name is [inaudible]. I come from China, Shanghai Jiao Tong University. I have a small question to ask Professor Douglas Reynolds. In your articles you say Aichi University in Japan rather than China is an entirely different school from TDS. I want to ask you what the difference is. Please tell me. That is one. Thank you.

馬場毅（東亜同文書院大学記念センター）：それでは鈴木先生で一応切らせていただいて、この後お答えをいただきたいと思っています。鈴木先生、お願いします。

鈴木（愛知大学）：愛知大学のスズキです。皆さんに二つ質問したいと思っています。すごくジェネラルな質問なのですが。一つは、レイノルズ先生はもう東亜同文書院のような学校は今後産まれ得な

いとおっしゃっていたのですが、本当にそうでしょうか。今後の、21世紀の東アジア共同体構想においてもとても重要なヒントになる学校のあり方だと思うのですが、東亜同文書院のような高等専門学校のようなものが今後アジアのどこかに生まれうる可能性は本当にはないでしょうか。皆さんにお伺いします。

二つ目は1905年の日露戦争の評価についてです。日露戦争の評価と東亜同文書院という問題を立てたときに、皆さんはどんなお考えをおもちでしょうか。一般によく言われることは、日露戦争までは日本の政治と軍事とアジア戦略はインテリジェンスの問題も含めてすごくソフィスケートされていたのだけれど、日露戦争に勝ってしまった後におかしくなってしまったと。そのおかしくなってしまったことに東亜同文書院がプレーキになったり、抑止力になったりしたことがあったようですが、日露戦争の評価という問題を考えるときに、東亜同文書院の存在をどのようにお考えか、この2点について皆さんにお伺いしたいと思っています。

馬場毅（東亜同文書院大学記念センター）：それではレイノルズ先生からフロアの質問と先ほどの栗田先生のコメントの内容も含めて簡単にお答えいただきたいと思っています。よろしくお願いします。

Professor Reynolds: Let me speak in English and first to address the question of spy schools, the first time I encountered that term was through Edgar Snow. And I thought he invented it. I did not know where it came from, and so today, I learned so much from Dr. Bastid-Bruguière's talk, including that there was a report which was called "School of Spies" on page 15. So it is very, very clear that at that point in time, early 20th century, that the French were

really sensitive to all these Japanese young people running around.

Ms. Bastid-Bruguière: I would like to discuss that because apparently from what he said in his report, the idea of the school of spies comes from a British captain, right? And you mention in 1906... it is 1906, is it? Because I do not have your paper, so I could not check. So the British captain is 1906. My article, in the French Socialist paper it is 1907. So the horrible man as usual is a British.

Professor Reynolds: Not the French.

Ms. Bastid-Bruguière: They said horrible things. And I will say it again and again. The British at that time were kings for doing that. They spread colony. You know in the tragedy by Shakespeare and it spreads around and it kills people and it makes people go to war. So that was started by British captain who probably was somebody from the intelligence service. He did it on purpose.

Professor Reynolds: You know, the term "spy" as it is used in English - I think it is used differently in the Japanese context versus in the West - but the term spy is really, really tricky. Basically, if a country is regulated and relatively closed, and journalists come to that country, they are all a bunch of spies because they are gathering information a lot of times the government does not want them to be reporting that information. So the term spy is very, very tricky. It is just like the term missionary or Christianity. In 19th century China, this is my view. In 19th century China, Christianity was

a form of cultural imperialism in China. Why? Because Christians were not wanted. They went in under unequal treaties and tried to change China using their special powers. That is a form of cultural imperialism. This is a term the Chinese used. When you get to the 20th century, that changes partly because the Chinese attitude toward...

The first thing, after the Boxer Rebellion, the Chinese government policy changed and they saw some of the benefits of Christian education and Christian mission work, medical work and so forth. So after the year 1900, the role of Christianity in China changes, partly because China is changing. In the 19th century, China was very conservative. It wanted to preserve its traditional ways; Christianity was subversive of those ways. After especially the *Nis-Shin sensō*, the attitude of Chinese opened up. They were forced to open up but in fact they realized how desperate the situation was, that they had to do something the way that Meiji Japan had done. They had to transform themselves in order to survive.

And in that context, it is very, very different. Then in the 1920s in China, Chinese themselves began to develop a Chinese Christianity - no longer an imperial Christianity but a Chinese Christianity. And today in China, there are so many Chinese Christians but it is a Chinese Christianity. And Catholicism in China is Chinese Catholicism, not under the power of Rome. So that makes a big difference. The time makes a big difference. So with the question of spies, I think the French were running around spying everywhere and when they saw other people



spying - or like you said the British. He was probably an intelligence officer - and so there is an expression in English, I have no idea how to translate it in English: It takes one to know one. How do you translate that? You know what I am getting at. So it takes a spy to be suspicious of somebody else spying. So I think this British guy and the French were trying to gather...

Ms. Bastid-Bruguière: No, the French did not believe that this was a school of spying. There was one article in a Socialist paper and then the other French had never thought it might be a school of spies. They just tried to investigate. And the answer from the people on the spot from the French on the spot was of course all Japanese are giving intelligence but it is not really spying because spy has a bad connotation. There is in English, and also in French we have, a good word for that. In English it is intelligence. Intelligence is very good. I mean, it is very nice. And in French we call it *renseignement*. That is information and that is fine. You can do that. It is quite legitimate. The problem is - what you said is true - is when one country is closed and does not want other people to know too much.

Myself, when I was a student in China, I was regarded as a spy. But that was in 1964, 1966 but it was the same for the Russians who were there at the time, or even the Albanians who were good friends of the Chinese at the time or the Vietnamese. They were considered as spies. So once you have this hat, I mean it always comes back. But what is interesting I think in the case of the TDK is to trace the date when you see the word starting and it is after the Russo-Japanese War. In fact it is 1906 only. But

it does not mean that this was really a school for spies.

Professor Reynolds: Should I continue? Because there was a related question. What do Westerners think of TDS? Most Westerners do not know about TDS and this is hopefully going to change. Nicky-sensei says that the University of Michigan, now that they have the materials, there is growing interest in this school and its relationship with China and its role. And so gradually, just as here at Aichi University in Japan, Japanese did not use to know it or they had an idea about it but it was uninformed. And gradually they will learn more about it. Now Aichi University has a relationship with Jiao Tong University in China in Shanghai. For a long time, I would bet that Jiao Tong University did not like TDS because they occupied their campus but now things are changing. And this also relates to a different question: Why can't there be another TDS? I really think it is impossible. TDS was a school created by Japanese for Japanese basically. They had ideas of having Chinese students but that is a very expensive and difficult thing. Now this student from Jiao Tong University comes here or professors. If Chinese want to learn Japanese today, they do not have to come and set up a special school. They come to Aichi University. Or foreigners who want to learn about Japan or China they go on their own. This is a different world and Japan is open, China is open and they welcome people.

Some people have good experiences, some do not, that is normal but it is a much cheaper way and there is no *shoin senshin*. That is what is

missing. There cannot be. You have your own experience. It is a different kind of thing and that is another reason why I do not think there can be another TDS. So this is very special. Preserve the memory, celebrate it, organize the materials and get the word out. Digitize them. Thank you.

Ms. Bastid-Bruguière: I would like to discuss that because apparently from what he said in his report, the idea of the school of spies comes from a British captain, right? And you mention in 1906... it is 1906, is it? Because I do not have your paper, so I could not check. So the British captain is 1906. My article, in the French Socialist paper it is 1907. So the horrible man as usual is a British.

Professor Reynolds: Not the French.

Ms. Bastid-Bruguière: They said horrible things. And I will say it again and again. The British at that time were kings for doing that. They spread colony. You know in the tragedy by Shakespeare and it spreads around and it kills people and it makes people go to war. So that was started by British captain who probably was somebody from the intelligence service. He did it on purpose.

Professor Reynolds: You know, the term "spy" as it is used in English - I think it is used differently in the Japanese context versus in the West - but the term spy is really, really tricky. Basically, if a country is regulated and relatively closed, and journalists come to that country, they are all a bunch of spies because they are gathering information a lot of times the

government does not want them to be reporting that information. So the term spy is very, very tricky. It is just like the term missionary or Christianity. In 19th century China, this is my view. In 19th century China, Christianity was a form of cultural imperialism in China. Why? Because Christians were not wanted. They went in under unequal treaties and tried to change China using their special powers. That is a form of cultural imperialism. This is a term the Chinese used. When you get to the 20th century, that changes partly because the Chinese attitude toward...

The first thing, after the Boxer Rebellion, the Chinese government policy changed and they saw some of the benefits of Christian education and Christian mission work, medical work and so forth. So after the year 1900, the role of Christianity in China changes, partly because China is changing. In the 19th century, China was very conservative. It wanted to preserve its traditional ways; Christianity was subversive of those ways. After especially the *Nis-Shin sensō*, the attitude of Chinese opened up. They were forced to open up but in fact they realized how desperate the situation was, that they had to do something the way that Meiji Japan had done. They had to transform themselves in order to survive.

And in that context, it is very, very different. Then in the 1920s in China, Chinese themselves began to develop a Chinese Christianity - no longer an imperial Christianity but a Chinese Christianity. And today in China, there are so many Chinese Christians but it is a Chinese Christianity. And Catholicism in China is Chinese



Catholicism, not under the power of Rome. So that makes a big difference. The time makes a big difference. So with the question of spies, I think the French were running around spying everywhere and when they saw other people spying - or like you said the British. He was probably an intelligence officer - and so there is an expression in English, I have no idea how to translate it in English: It takes one to know one. How do you translate that? You know what I am getting at. So it takes a spy to be suspicious of somebody else spying. So I think this British guy and the French were trying to gather...

Ms. Bastid-Bruguière: No, the French did not believe that this was a school of spying. There was one article in a Socialist paper and then the other French had never thought it might be a school of spies. They just tried to investigate. And the answer from the people on the spot from the French on the spot was of course all Japanese are giving intelligence but it is not really spying because spy has a bad connotation. There is in English, and also in French we have, a good word for that. In English it is intelligence. Intelligence is very good. I mean, it is very nice. And in French we call it *renseignement*. That is information and that is fine. You can do that. It is quite legitimate. The problem is - what you said is true - is when one country is closed and does not want other people to know too much.

Myself, when I was a student in China, I was regarded as a spy. But that was in 1964, 1966 but it was the same for the Russians who were there at the time, or even the Albanians who were good friends of the Chinese at the time or the Vietnamese. They were considered as spies.

So once you have this hat, I mean it always comes back. But what is interesting I think in the case of the TDK is to trace the date when you see the word starting and it is after the Russo-Japanese War. In fact it is 1906 only. But it does not mean that this was really a school for spies.

Professor Reynolds: Should I continue? Because there was a related question. What do Westerners think of TDS? Most Westerners do not know about TDS and this is hopefully going to change. Nicky-sensei says that the University of Michigan, now that they have the materials, there is growing interest in this school and its relationship with China and its role. And so gradually, just as here at Aichi University in Japan, Japanese did not use to know it or they had an idea about it but it was uninformed. And gradually they will learn more about it. Now Aichi University has a relationship with Jiao Tong University in China in Shanghai. For a long time, I would bet that Jiao Tong University did not like TDS because they occupied their campus but now things are changing. And this also relates to a different question: Why can't there be another TDS? I really think it is impossible. TDS was a school created by Japanese for Japanese basically. They had ideas of having Chinese students but that is a very expensive and difficult thing. Now this student from Jiao Tong University comes here or professors. If Chinese want to learn Japanese today, they do not have to come and set up a special school. They come to Aichi University. Or foreigners who want to learn about Japan or China they go on their own. This is a different world and Japan is open, China is open and they

welcome people.

Some people have good experiences, some do not, that is normal but it is a much cheaper way and there is no shoin senshin. That is what is missing. There cannot be. You have your own experience. It is a different kind of thing and that is another reason why I do not think there can be another TDS. So this is very special. Preserve the memory, celebrate it, organize the materials and get the word out. Digitize them. Thank you.

馬場毅（東亜同文書院大学記念センター）：すみません、司会の不手際で報告なさった先生方、喋りたいことがたくさんあるので、時間を制限するのを忘れました。大変申し訳ないのですが、これから3分以内にさせていただきたいです。

ニキ・ケンジ（ミシガン大学）：それでは私が3分以内に質問に対して答えます。

馬場毅（東亜同文書院大学記念センター）：3分経ちましたらベルを鳴らしますのでよろしく願います。

ニキ・ケンジ（ミシガン大学）：東洋文庫の大沢氏の質問ですが、Hathi Trust に関しては、ご指摘のように非常に詳しく URL に載っていますので、それを読んでください。もう一つは、Hathi Trust と他の電子媒体のコレクションですが、Hathi Trust は元々カリフォルニアベースなので、それでカリフォルニアが共同で自分たちのコレクションをやろうではないかということで始まったのです。ただ、ミシガンは膨大なものを持っていたので、ミシガンと Hathi のグループが話し合っ、それではミシガンもそれに加わろうと。そのときミシガンは中西部の CIC のグループも

一緒にもって行って巨大なものを作り上げようとなったわけです。その根底的なものはノンプロフィット・オーガニゼーションとしてお金なしにいろんな情報ができると。先ほどおっしゃったもう一つのグループはノンアカデミックであったり、アカデミックであったり、その価値判断が今のところはできていないと思います。でも、この Hathi に関してはすべて大学のライブラリーを中心としたグループなのです。だから、その違いだと思います。

先ほどおっしゃった新聞のあれに関してですが、新聞業界は絶対的に苦しい立場にあることはもう明らかなことです。というのは、今、私どものところで朝日新聞、読売新聞、日本経済新聞、赤旗、全部今までコピーをとっていたのです。ところが、今はそれを飾っていても読まないのです。皆どうしているかというインターネットで読むのです。したがって、新聞そのもののコンセプトが変わってきているのです。だから宅配されていく、ペーパーでこうやって見る新聞というのは本当に限定されてくるのではないかと私は思います。ただ、その業界がつぶれるかどうかは私は全然わかりません。ただ、今の状況としては、インフォメーションはそのようにしていろいろな媒体を変えて私たちのところに飛び込んできていますので、私もほとんどペーパーを今読みません。全部インターネットで読みます。だから、そこところは私に判断をさせないでください。お願いします。以上です。

馬場毅（東亜同文書院大学記念センター）：ありがとうございます。では武井さん、お願いします。

武井義和（愛知大学東亜同文書院大学記念センター）：栗田先生からのご質問ということでしょうか。栗田先生からいただいたご質問についてなの



ですが。日本の汎アジア主義をいかに解釈するかという流れの中で東亜同文会、同文書院が論じられてきたということであろうかということなのですが。私がサーラ・スヴェンさんの論文を挙げたのは、まず先行研究を整理するという流れの中で日本の研究は同文書院に焦点をあてて、それについて深く掘り下げる研究が多いのだけでも、一方で欧米ではダグラス・レイノルズ先生以外はむしろそういう扱い方をされていなくて、中国近現代史や日本近現代史に関するマクロ的な歴史、それを捉える一つの手段として東亜同文会、そして東亜同文書院が扱われている、そういう傾向が強いのではないかということをおし上げて、その一つの事例として挙げたのです。私がサーラ・スヴェンさんの論文を挙げた意図はまずそういうところにあります。

せっかくですので思想的な問題で東亜同文会、東亜同文書院が論じられてきたのかということなのですが、この論文に密着して言いますと、同文書院や同文会は対象には論じられていません。今言ったようにむしろ近代日本の思想を考えるというマクロ的分析のケーススタディとして同文書院や同文会が位置づけられています。サーラ・スヴェンさんは、ちなみに申しますと、初期の頃の同文書院や同文会は愛国的な団体ではなくて、むしろアジアとの連帯を目指す団体であったということをおっしゃっています。最初はそれほど大きな組織ではなかったと。右翼的な思想をもっていたけれども、それほど大きな団体ではなかった。ただ、いろいろと宣伝活動などそういうチャンネルを通じて思想が拡大的に広がっていったということをおっしゃっています。もちろんそれは東亜同文会ではなくて、たとえば黒竜会といった当時の大きな右翼的な団体など、そうしたその他の団体のことを含めてそういうふうに言われてわけなのです。ちょっと栗田先生のお答えにまともでない形になってしまいましたが、そういう形で

お答えさせていただきたいと思います。

馬場毅（東亜同文書院大学記念センター）：栗田先生、お願いします。

栗田尚弥（国学院大学）：先ほど二つのご質問があったと思います。同文書院のような学校がこれからありうるのか。それから日露戦争をどう捉えて、その中で同文書院の位置づけはどうかというご質問があったと思います。最初の、今後同文書院のような学校がありうるのかどうかということなのですが、私もほぼレイノルズ先生と同じような意見でして、現在の日本の経済力をもってすれば、カリキュラム、あるいは規模、あるいは海外に学校を作ると。現在作っている学校もありますから、それは十分可能だと思います。

問題は先ほど最後に私がいちばん言いたかったことなのですが、まさにスピリット、精神の問題であって、先ほど一つの例を挙げましたが、あなたはそんな学問をやっていて儲かるのですか、というような精神と言いますか、そういう教員の中で果たして同文書院のような制度であるとか、あるいはシステムであるとか、それは真似できても、そのスピリットの問題です。これは教員もそうですし、学生ももちろんそうですが、ちょっと恥になります、インターネットで公開されてしまいましたが、私の母校のある先生が女子学生にあることをして首になったと。正直言ってそういうような墮落した精神の教員も…この学校にはいらっしゃいませんが、少なからずいるという現状の中で、容れ物はできても精神が作れるかということです。決して私は右翼ではないのですが、精神改革なくして同文書院のものというのはちょっと難しいかな、と。この愛知大学には私は期待しているのですが。カリキュラムの面からもいろんな生徒さんとか、あるいは若手、そしてベテランの先生方と話しても愛知大学には期待しています。そ

ういうものがいくつもあるかという、これはゼロという意味ではないのですが、ちょっとシビアに考えなければいけないなど。これは日本の教育界全体にとって考えるべき問題だと思います。

日露戦争の問題なのですが、これは意地悪な質問をされたなと思うのですが。これは答えようと思えば1冊の本になってしまう。今学校でこの部分を教えるところなのですが、軽々には結論は出せなくて。一般的には防衛戦争であったけれども結果として帝国主義になってしまったみたいなことを言われていますが、実際はもっと複雑であって、ちょっと海外の日本への流れの中で基本的に…ちょっとフランスには失礼なのですが、フランスはどちらかというとロシア寄りだったのですが、やはりその他の国々はアメリカもイギリスも日本支援と。のみならずアジア諸国、ヨーロッパの、これはロシアに圧迫されている国のみならず小国と言われている国々、大国の影に隠れていた国々はやはり日本支援であったと、日本を支持していたと。ですから、全世界的に日本は世界で孤立しているのではなくて、この時点は二つのパターンで支持されていたと。ある種アジアの星と言いますか、被圧迫者の星としての日本と。もう一つはまさによく言われる言葉ですが極東の憲兵としての日本ということで、違った意味で世界の国々から期待されていたと思うのです。その中で日露戦争の意味づけとなされるべきだと思いますが、問題は終わった後に日本が期待のどちらの方向を選んだということになっていくと思うのですが…だいたい私の言いたいことはおわかりになってくれると思うのですが、これも簡単に言える…説明していくと1冊の本になってしまうので、この点、日露戦争の意味づけにおいてはちょっとずるいですが、こういう形でほかします。

同文会、同文書院なのですが、同文書院に関しては、このときもう少し後に卒業する石射猪太郎

さんが同文書院はどこにいてもなかなか就職できなかったということですから、社会全体がまだ書院に対する役割というのは…失礼ですがあまり望んでいないと。そういう意味で書院自体が軍に協力ということは、日露戦争の段階ではないです。

同文会は要するに宣伝という意味で協力していることは確かにあります。日本で意見を宣伝するという点で。ただし、それも何のために協力したかを考える必要があると僕は思います。近衛の対ロシア観と絡んでくるところがあると思いますので、これも軽々に国策に協力したということは言えないのではないかと。時間もきているようなので、非常にずるい答えでちょっと勘弁していただきたいと思います。また後ほどいろいろお話ししたいと思います。

馬場毅（東亜同文書院大学記念センター）：どうも5名の方ありがとうございました。報告者の方、まだまだお話ししたいことがあるかと思いますが、だいたい時間が超過していますので、一応これにて討論は終わりにさせていただきます。最後に私どものセンター長の藤田所長から最後の挨拶をいたします。

藤田佳久（愛知大学東亜同文書院大学記念センター所長）：どうも最後までご清聴いただきましてありがとうございました。本日はこういう形で「欧米研究者から見た東亜同文書院」ということであるお話をいただき、会場からもいろいろなご意見をいただきまして、私もいちばん前でメモを取りながらここも面白そうだな、と20ページくらいメモを取りました。そういう点では大変面白いと思いますか、書院のもっている深さと言いますか、多面性と言いますか、あるいは時代の中でのダイナミクスと言いますか、そういうものがそれぞれの側面からいろいろ見られるということだと思うのです。

目の見えない方が象に触ったときに細長いもの
だとか平べったいものだとか太いものだとかいろ
いろ言われたというお話ですが、それはやたらに
くっつけても1匹の象にはなりません。いかに象
にしていくかというのはやはり総合的な広い視点
があると思います。そういう意味で言いますと、
日頃我々がやっている日本とか日中とかというレ
ベルからさらに国際的なレベルの視点でいろいろ
議論がありました。少しそういう形も従来とは違
った形で出てきたようなところもあると思いま
す。そういう意味で、今日我々もこのシンポジウ
ムを開いて大変良かったと思っています。この後
6時から、ぜひ皆さんあそこ少し多めに用意して
あります。お金は要りませんので、先生方のお

話も出来ますのでこの後ぜひ懇親会のほうへご出
席いただきたいと思います。では最後に、今日ご
発表いただきました5人の先生方に再度拍手で一
つよろしく申し上げます。いろいろありがとうございました。
厚く御礼申し上げます。

馬場毅（東亜同文書院大学記念センター）：藤田
先生、ちょっと一言。解散する前に、同時通訳
で大変ご苦労いただきました方、サイマルの方に
最後に拍手をいただきたいのですが、よろしくお
願いします。これにて解散させていただきます。
どうぞ多数懇親会にご参加ください。無料でごさ
います。

(了)



欧米研究者から見た 東亜同文書院

日時 2009年10月10日(土) 13:00~17:00

会場 愛知大学豊橋校舎 記念会館
※豊橋駅西口徒歩5分「愛知大学前」駅下車すぐ

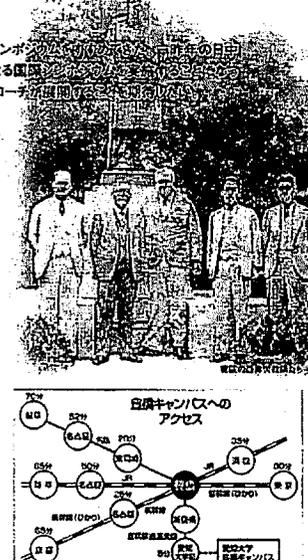
■定員150名
(当日受付席)
■英語・日本語の
同時通訳

当記念センターのプロジェクトとして東亜同文書院をめぐる国際シンポジウム「東亜同文書院の歴史と未来」の一環として、欧米の研究者による国際シンポジウムをつづき、今回は欧米研究者による国際シンポジウムを開催いたします。これまでとは異なった新たな視点から東亜同文書院へのアプローチを模索いたします。

発表

1. ダグラス・R・レイノルズ氏 (ジョージア州立大学)
「明治のモーターの革新的パイオニアとしての東亜同文書院」
2. マリアヌ・バステド・ブルガー氏 (フランス学士院)
「20世紀前半期のヨーロッパ人の
東亜同文書院に対する知見と視点」
3. ニキ・ケンジ氏 (ミシガン大学)
「ミシガン大学における東亜同文書院および
アジア系文庫史料のデジタル化とその利用」
4. 武井義和氏 (愛知大学東亜同文書院大学記念センター)
「第2次大戦後の欧米における東亜同文書院研究」
5. コメンテーター 栗田尚弥氏 (国学院大学)

当日は開演する「愛知大学記念館」の中の「東亜同文書院大学記念センター展示室」を10時から公開いたします。ぜひ、ご覧ください。



豊橋キャンパスへの
アクセス

■大場無料 24時間利用可能